



Title	日本の高校と大学におけるアラビア語の教育と学習者
Author(s)	鷺見, 朗子; 鷺見, 克典
Citation	アラブ・イスラム研究. 2016, 14, p. 103-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105970
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本の高校と大学におけるアラビア語の教育と学習者

鷺見 朗子^{*}，鷺見 克典^{**}

Arabic Language Instruction and Learners in Japanese High Schools and Universities

The purpose of this study is to examine the current conditions and distribution of Arabic instruction in Japan. Recently, a number of incidents related to Arab-Islamic regions have occurred, which have caught the attention of people around the world. Situations in the homelands of many Arabic speakers are changing momentarily. Given these emerging circumstances, a comprehensive picture of the current state of Arabic instruction in Japan is required.

There are a small number of prior studies on universities that offer Arabic courses and their students. The results of this study indicate that Arabic instruction in Japan has been conducted chiefly within the sphere of higher education, although there are three high schools that offer Arabic courses. The number of universities that offered Arabic language courses in the 2014 academic year was 48 out of approximately 780 universities. All of these 48 offered Arabic as elective courses, and only two had an Arabic specialization program. Over the past decade, the number of universities has not changed much, but the number of Arabic courses offered in them has doubled. However, in about eighty percent of these courses, the students meet once per week for 90 minutes and for 15 weeks overall. The estimated number of students who took Arabic courses in the 2014 academic year was approximately 3700. The geographic distribution of the universities offering Arabic is inclined toward metropolitan areas, such as Tokyo. These results, taken in the context of the current global situation, indicate that Arabic instruction in Japan should be improved, both in quality and quantity. Also, further studies should be designed to observe developments, and to more fully investigate the merits and demerits relating to Arabic instruction in Japan. Comparisons with the state of Arabic instruction in other countries is suggested as a means of assessment and for making improvements.

1. はじめに

本研究は日本のアラビア語教育の実態と普及の状況を明らかにすることを目的と

* 京都ノートルダム女子大学 教授

** 名古屋工業大学大学院 教授

している。これまでもアラビア語科目を提供する大学数等の調査や高等教育機関とその学習者を対象とした種々の調査が実施されてきている (Sumi and Sumi 2016a, 2016b; 門屋 2006)。一方、グローバル化の進展と国際的な競争の高まりを背景として、アラブ・イスラム圏をめぐる事態や変化が一般の日本人の耳目に触れることはもはや日常である。インターネットの普及によるアラビア語に接する機会の増加、アラビア語を理解する人材の必要性の増大を含め、様々な環境条件はアラビア語学習の普及と教育拡充への要請に向けて変化していると考えられる。こうした背景から、日本におけるアラビア語の教育と学習者に関する現状について、より包括的かつ詳細な把握が希求されていると言えよう。

本研究は、2014年3月から2015年10月にかけて実施した調査結果に基づいて、日本の高等学校 (以下、高校) および大学におけるアラビア語の教育と学習者の現況をまとめ、考察を加えたものである。

対象とした大学には通信制大学、大学院のみを設置する大学院大学、短期大学は含めていない。大学院も含めない。ただし、放送大学は含めた。高校や大学への調査は事務担当者やアラビア語関連科目の担当教員へ、電話、電子メール、訪問を通じて、直接聴取した。また、それら高校や大学が作成したウェブサイトの掲載情報を参照した。文部科学省による情報は、ウェブサイト掲載の公開資料をはじめ、必要に応じて電子メールによる担当部局とのやりとりから得た。特に文献を示していない情報は著者が担当者から直接聴取したものである。また、これまでに発表されてきた関連する調査の結果 (高階 2007; 後藤 2013; Miura 2012) を適宜参照した。

2. 公教育におけるアラビア語教育

日本のアラビア語教育は、公教育において、高等教育機関を中心に行われている。しかし、アラビア語科目を設置する教育機関は決して多いとは言えない。後に詳しくみるように、2013年度にアラビア語科目を開設していた大学は、総大学数771 (文部科学省高等教育局大学振興課 2015)¹⁾の5.9% (46大学) に過ぎない。

近年、日本の外国語教育は英語が主である (岡戸2007:11-19)。現在の大学入試センター試験の外国語科目は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語²⁾である。大学入試センター試験の外国語受験者のうち、英語の受験者は2014年度で約99.8%である (大学入試センター 2016)。アラビア語教育を行う中学校は、2007年から2014年の隔年による調査では、存在しないとされている (文部科学省初等中等教育局国際教育課 2012a, 2012b, 2012c)。一方、わずかではあるが、アラビア語の授業を行う高校がある。

1) 2013年度の総大学数は、平成25年度学校基本調査 (文部科学省生涯学習政策局政策課 2013) では782大学であるが、ここでは外国語教育の実施状況が掲載された「大学における教育内容等の改革状況について (平成25年度)」 (文部科学省高等教育局大学振興課 2015) に従った。

2) 韓国と北朝鮮で用いられている言語を本研究では韓国・朝鮮語と呼ぶ。

2.1. 高校

高校で開設されている科目の外国語は、英語以外にも様々なものがある。2014年と2012年の少なくともいずれかに開設されていた科目の外国語は、2014年度の開設学校数の多い順に、中国語、韓国・朝鮮語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、ポルトガル語、ペルシア語、フィリピン語、古典ラテン語、タイ語、ベトナム語、ネパール語、トルコ語、インドネシア語、アラビア語、エスペラント語の18言語である。開設学校数は、もっとも多い中国語が517校、ついで韓国・朝鮮語333校、フランス語223校、スペイン語109校、ドイツ語107校、ロシア語27校、イタリア語13校、ポルトガル語12校となっている。アラビア語を含め、ペルシア語以下の10言語については、開設校数は各語5校以下である（文部科学省初等中等教育局国際教育課 2012a, 2012b, 2012c）。

アラビア語科目を2016年度に提供する高校として、3校が確認された³⁾。2校は私立で、比較的規模の大きい総合大学の付属校である。一方は80%以上（立教新座中学校・高等学校 2016）、他方はほとんどの生徒（慶應義塾志木高等学校 2016）が系列大学へ進学している。他の1校は国際教育に熱心な公立高校である。3校は長期的な視野に立った戦略をもち、真のグローバル化・国際化を理念に掲げている点で共通している。

(1) 慶應義塾志木高校

埼玉県私立男子校である。英語以外の外国語として、1991年度から23言語、2015年度からは24言語の科目を提供している。それらの内の1つがアラビア語である。他の言語は、フランス語、ドイツ語、中国語、スワヒリ語、ヘブライ語、ペルシア語等である。アラビア語は、2年生の選択必修科目である週2回の「総合的な学習の時間」あるいは週1回の「語学課外講座」で学習することができる。現在の担当教師は日本人である。24言語もの外国語科目を提供する理由は、文化や言語に優劣はないことを教え、言語と文化に具体的に接することで広く世界に目を向けさせることである（慶應義塾志木高等学校 2016）。

(2) 立教新座高校

キリスト教に基づく中高一貫教育を行う埼玉県私立男子校である。第2外国語の1つとしてアラビア語の履修が可能である。他にはフランス語、ドイツ語、スペイン語、韓国・朝鮮語、中国語、イタリア語、ロシア語、ラテン語がある。これら第2

3) 文部科学省によれば、アラビア語科目を開設している高校は、2014年5月1日現在で存在せず、2009年6月1日現在では、公立2校、私立1校、2012年5月1日現在では、公立と私立共に1校であった（文部科学省初等中等教育局国際教育課 2012a, 2012b, 2012c）。

外国語は、70から80講座からなる3年生の「自由選択科目」の一部である (立教新座中学校・高等学校 2016)。第2外国語の科目は1996年度から提供しており、アラビア語は1998年度に加えられた。授業は週2回、現在は日本人が担当している。履修者は年度によって5名以下から、20名余である。第2外国語を自由選択科目に取り入れた理由は、国際理解に必要なコミュニケーションの手段として、英語以外の外国語にも目を向け、独自のカリキュラムに位置付けるためである (戸村 1997)。

(3) 神奈川県立横浜国際高校

2008年の創立時より、英語以外の外国語としてフランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、韓国・朝鮮語、アラビア語の6言語を、1年生で選択必修とし、2年生、3年生でも継続履修可能としている。アラビア語科目は週3回であり、担当はアラビア語ネイティブスピーカーである。2010年度からは東京外国語大学と高大連携協定を結び、卒業後も選択言語の学習を可能としている。国際社会でリーダーとして活躍する人材育成を目指す高校として (神奈川県立横浜国際高等学校 2016)、サウジアラビアをはじめとしたアラブ諸国の学生・生徒の訪問を受け入れるなど、ネイティブスピーカーとの交流にも注力している。アラビア語科目を提供する公立高校は同校のみである (神奈川県立横浜国際高等学校 2016)。

2.2. 大学

アラビア語科目を提供する大学について、まず、アラビア語科目を提供する大学数の推移をみた後で、提供されてきた他の外国語との関連を確認する。その後、アラビア語科目を提供する大学を詳しくみていく。

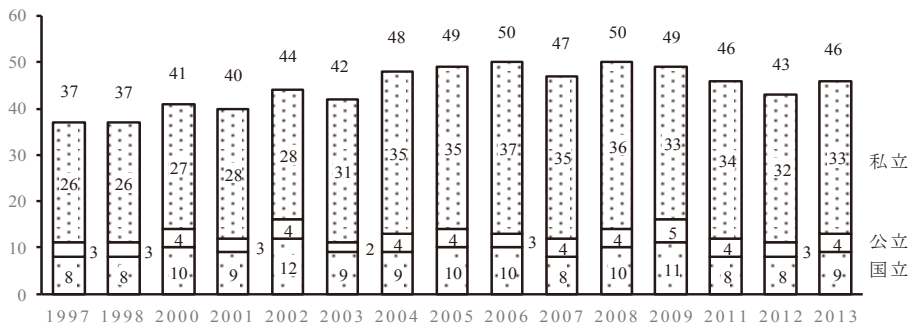
2.2.1. アラビア語科目を提供する大学数の推移

アラビア語科目を提供している設置主体別の大学数について、1997年度から2013年度までの推移を図1に示した⁴⁾。1997年度の37大学が漸増し、2006年度および2008年度には50大学に達した以降は、43から50の間を変動している。1997年度から2013年度は1.24倍となっている。

設置主体別にみると、アラビア語科目の提供は私立が圧倒的に多い。そもそも大学全体の中で私立の割合が多いことから当然と言える。しかし、例えば2013年度では、すべての私立606大学に対するアラビア語科目を提供する私立33大学の比 (0.05) は、すべての国立86大学に対するアラビア語科目を提供する国立9大学の比 (0.10) のおよそ半分であった (文部科学省生涯学習政策局政策課 2013)。国立と公立の大

4) 高階(2007:18)は、大阪外国語大学が文部科学省の依頼によって実施した調査の結果、2001年2月にアラビア語科目を提供している大学の総数が27大学(アラビア語専攻がある大学が3、選択あるいは選択必修としてアラビア語を提供している大学が24)と報告している。本研究は文部科学省による統計に基づいた。

学数は1997年度以降、大きな変化がないことから、この間の変化は私立のアラビア語科目開設によるところが大きいと言える。



注：文部科学省高等教育局大学振興課(2001から2013)に加え、文部科学省の担当部局から聴取した情報を基に著者が作成。1999年度と2010年度は情報が得られなかった。

図1 アラビア語科目提供大学数の推移

2.2.2 外国語科目を提供する大学数の推移

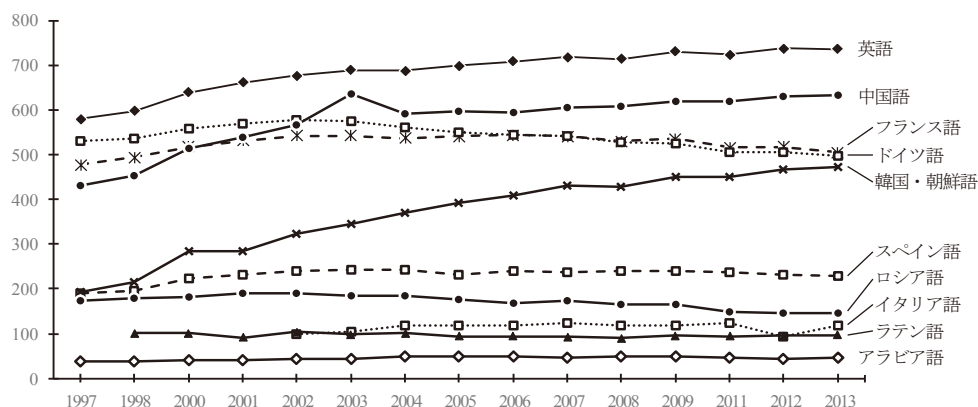
外国語科目を提供する大学数の推移におけるアラビア語科目の提供大学をみていきたい。英語、中国語、フランス語、ドイツ語、韓国・朝鮮語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、ラテン語、アラビア語について、1997年度から2013年度における科目の提供大学数を示したものが図2である。なお、日本の総大学数は、1997年度が587大学、2013年度が771大学（文部科学省高等教育局大学振興課 2015）⁵⁾であり、1.31倍になっている。

この間もっとも増加した言語が韓国・朝鮮語であり、約2.47倍（192大学から474大学）である。次に中国語が約1.47倍（431大学から633大学）である。英語は約1.27倍（580大学から737大学）、スペイン語は約1.21倍（190大学から230大学）であり、ラテン語は安定している（期間中、約100大学）。逆に、ドイツ語、ロシア語、フランス語は期間前半は増加を示すものの、前2言語は2004年度（562大学と184大学）、フランス語は2006年度（544大学）をピークに、減少を示している。アラビア語は前述の通り1.24倍である。

2013年度について大学全体から見ると、それらアジアの言語の中で、中国語は1.22大学に1校、韓国・朝鮮語は1.63大学に1校で科目が提供されている。アラビア語は16.7大学に1校と、韓国・朝鮮語のほぼ10分の1である。アラビア語科目を提供する2013年度の大学数は外国語全体の中で12番目に多い⁶⁾。

5) 注1参照。

6) アラビア語科目を提供する大学よりも多いのは、図2に示したアラビア語以外の9言語に加え、ギリシア語とポルトガル語の計11言語の科目を提供する大学であった。



注：文部科学省高等教育局大学振興課(2001から2013)に加え、文部科学省の担当部局から聴取した情報を基に著者が作成。1999年度とイタリア語の1997年度から2001年度、ラテン語の1997年度については情報が得られなかった。

図2 外国語科目提供大学数の推移

2.2.3 アラビア語科目を提供する大学⁷⁾

表1はアラビア語科目を提供する大学について、担当教員、提供する学部、科目種別、科目名等をまとめたものである。アラビア語科目を提供する大学の総数は2014年度で48大学であった⁸⁾。これはアラビア語専攻のある大学と、アラビア語専攻以外の学生（一般学生と略記）にアラビア語科目が提供されている大学の2つに分類できる。現在、前者の大学は東京外国語大学と大阪大学の国立2大学のみである。この2大学は一般学生にもアラビア語科目が提供されていることから、後者の大学にも含めるため、後者は全体と同じ48大学となる。

表1に示した2014年度の科目数は、前期が139科目、後期⁹⁾が134科目、合計273科目であった。2005年度の科目数は138科目（高階 2007）¹⁰⁾あり、倍増したと言える。

次に、2014年度に1つ以上のアラビア語科目を受講した学生数を概算してみたい。表1の一般学生対象のアラビア語科目の履修登録者数は、前期2,917名、後期2,362名、合計5,279名であった¹¹⁾。ただし、通年で履修すべき科目（通年科目と略記）や前期・後期を1組として併せて履修させる科目（セット履修科目と略記）もあることから、

7) 本節で記載する内容は指定のない限りすべて2014年度のものである。

8) 2015年度はお茶の水女子大学、神戸大学がアラビア語科目を提供しておらず、国際基督教大学、福井県立大学、龍谷大学が提供したことから、49大学である。

9) 前期を春学期、後期を秋学期と呼称する大学もあった。また放送大学は前期を1学期、後期を2学期と呼ぶ。

10) 高階(2007)の対象は2005年度である。高階(2007)は一部の科目について前期開講と後期開講の区別、および科目ごとの記載をしていないことから、全体の科目数は部分的に推定した。

11) 表1に記したすべてのアラビア語科目の履修登録者数を聴取から得たが、大学が特定されないことを条件として得ているため、個別の数字は明らかにできない。

表1 アラビア語教育大学一覧 (2014年度)^{12) 13) 14) 15)}

アラビア語専攻のある大学(2大学)												
大学名〔都道府県〕	学部等											
東京外国語大学〔東京〕n a	ア語専攻、言語社会学部言語社会学科、国際社会学部国際社会学科が該当。2学部で定員約30名											
大阪大学外国語学部〔大阪〕n a	外国語学科ア語専攻(定員25名)、外国語学科日本語専攻(1学年約2, 3名)											
一般学生にアラビア語科目を提供する大学(46大学)												
大学名〔都道府県〕	担当	学部、科目種別等	前期科目名	後期科目名	備考							
北海道大学〔北海道〕n	常	文学部	東洋史学演習 [2]		内容はア語の初級文法							
宮城学院女子大学〔宮城〕	非	国際文化学科	ア語初級Ⅰ [2]	ア語初級Ⅱ [2]								
筑波大学〔茨城〕n*	常 非 ネ	外国語センター	ア語基礎AⅠ [0.5]	中東・北アフリカ文化圏の言語と文化ⅠA [0.5]	週2回							
			ア語基礎BⅠ [0.5]	中東・北アフリカ文化圏の言語と文化ⅠBC [1]								
			ア語基礎AⅡ [1]		週2回							
			ア語基礎BⅡ [1]									
神田外語大学〔千葉〕	常 非	外国語学部	ア語Ⅰ(a) [2] ア語Ⅱ(a) [2] トライ・ア語 [1]	ア語Ⅰ(b) [2] ア語Ⅱ(b) [2]	週2回 週2回 前期集中講義(5日間)							
千葉大学〔千葉〕n*	非	普遍教育	ア語初級Ⅰ(ア語Ⅰ) [1] ア語中級Ⅰ(ア語3) [1]	ア語初級2(ア語2) [1] ア語中級2(ア語4) [1]								
東京国際大学〔埼玉〕	非	国際関係学部 人間社会学部	ア語入門A [1] ア語入門B [1] ア語Ⅰ [2]	実践ア語A [1] 実践ア語B [1] ア語Ⅱ [2]	AとBを併せて履修、週2回 週2回。Ⅰはア語入門A、Bと、Ⅱは実践ア語A、Bと同一クラス							
獨協大学〔埼玉〕	非 ネ	外国語学部	ア語Ⅰa 会話と文化 [1] ア語Ⅱa 読み書きと文法の基礎 [1]	ア語Ⅰb 会話と文化 [1] ア語Ⅱb 読み書きと文法の基礎 [1]								
亜細亜大学〔東京〕	常 非 ネ	全学共通	ア語初級Ⅰ [1] ア語初級Ⅲ [1] ア語中級Ⅰ [1] ア語中級Ⅲ [1]	ア語初級Ⅱ [1] ア語初級Ⅳ [1] ア語中級Ⅱ [1] ア語中級Ⅳ [1]								
			国際関係学部	地域言語初級(ア語Ⅰ) [1] 地域言語初級(ア語Ⅱ) [1] 地域言語初級(ア語Ⅲ) [1] 地域言語中級(ア語Ⅰ) [1] 地域言語中級(ア語Ⅱ) [1] 地域言語中級(ア語Ⅲ) [1] 地域言語上級(ア語Ⅰ) [1]	地域言語初級(ア語Ⅳ) [1] 地域言語初級(ア語Ⅴ) [1] 地域言語初級(ア語Ⅵ) [1] 地域言語中級(ア語Ⅳ) [1] 地域言語中級(ア語Ⅴ) [1] 地域言語中級(ア語Ⅵ) [1] 地域言語上級(ア語Ⅱ) [1]							
				ア語Ⅰ [2] ア語Ⅲ [2]	ア語Ⅱ [2] ア語Ⅳ [2]	週2回 週2回						
				現代アジア諸語Ⅲ [2]	現代アジア諸語Ⅳ [2]	隔年開講						
	外国語教育研究センター	ア語B(初級)1会話 [1] ア語B(初級)2会話 [1] ア語C(初級)1 文字 [1] ア語C(中級)1 文字 [1] ア語R(中級)1 [1]		ア語B(初級)1会話 [1] ア語B(初級)2会話 [1] ア語C(初級)1 文字 [1] ア語C(中級)1 文字 [1] ア語R(中級)1 [1]	通年科目 通年科目 通年科目 通年科目 通年科目							
		共立女子大学〔東京〕* 慶應義塾大学〔東京・神奈川〕a		常 非 ネ	教養教育	基礎ア語Ⅰ [1] ア語(a) [1]	基礎ア語Ⅱ [1] ア語(b) [1]	通年科目				
						外国語研究センター〔神奈川〕 文学部〔東京〕	ア語Ⅰ [1] ア語Ⅲ [1] ア語基礎Ⅰ [1] ア語古典Ⅰ [1] ア語現代文講読Ⅰ [1] ア語文献講読Ⅰ [1]	ア語Ⅱ [1] ア語Ⅳ [1] ア語基礎Ⅱ [1] ア語古典Ⅱ [1] ア語現代文講読Ⅱ [1] ア語文献講読Ⅱ [1]				
				総合政策学部・環境情報学部〔神奈川〕	ア語インテンシブ1 [4] ア語インテンシブ2 [4] ア語インテンシブ3 [4] ア語スキル [2] ア語海外研修A [4]		ア語インテンシブ1 [4] ア語スキル [2]	週2回 週4回、1回100分 週4回、1回100分 週90時間以上				
					上智大学〔東京〕		常 非	外国語学部	ア語初級文法Ⅰ [1] ア語初級読本1 [1] ア語中級Ⅰ [1] ア語上級Ⅰ [1]	ア語初級文法2 [1] ア語初級読本2 [1] ア語中級2 [1] ア語上級2 [1]		
			成蹊大学〔東京〕						非	文学部	ア語の世界Ⅰ [2]	ア語の世界Ⅱ [2]
	創価大学〔東京〕										常	教養科目
			大東文化大学〔東京〕a						常 非 ネ	国際関係学部		

大学名 [都道府県]	担当 学部	科目種 別等	前期科目名	後期科目名	備考
拓殖大学[東京]	常 非 ネ	商学部・政経 学部	1年ア語①Ⅰ [1]	1年ア語①Ⅱ [1]	
			1年ア語②Ⅰ [1]	1年ア語②Ⅱ [1]	
			2年ア語①Ⅰ [1]	2年ア語①Ⅱ [1]	
			2年ア語②Ⅰ [1]	2年ア語②Ⅱ [1]	
		国際学部	初級ア語Ⅰ-A [1]	初級ア語Ⅱ-A [1]	
			初級ア語Ⅰ-B [1]	初級ア語Ⅱ-B [1]	
				ア語リーディング [1]	
			中級ア語Ⅰ-A [1]	中級ア語Ⅱ-A [1]	
			中級ア語Ⅰ-B [1]	中級ア語Ⅱ-B [1]	
				ア語ライティング [1]	
			上級ア語Ⅰ [1]	上級ア語Ⅱ [1]	
			ア語上級リーディング&ライティングⅠ[1]	ア語上級リーディング&ライティングⅡ [1]	
中央大学[東京]a	常 非	文学部	ア語Ⅰ [1]	ア語Ⅱ [1]	
			アジア諸言語(1)(初級)A [2]	アジア諸言語(1)(初級)B [2]	
			アジア諸言語(1)(上級)A [2]	アジア諸言語(1)(上級)B [2]	
			ア語史料演習(1)A 3年ゼミ [2]	ア語史料演習(1)B 3年ゼミ [2]	
			ア語史料演習(1)A 4年ゼミ [2]	ア語史料演習(1)A 4年ゼミ [2]	
東京大学[東京]n a	常 非 ネ	教養学部	ア語初級(第3外国語) [2]	ア語初級(第3外国語) [2]	通年科目
			ア語中級(第3外国語) [2]	ア語中級(第3外国語) [2]	
			ア語会話(第3外国語) [2]		
			共通ア語(1) [2]	共通ア語(2) [2]	共通ア語(1)(2)はア語初級と同一
			共通ア語(3) [2]	共通ア語(4) [2]	共通ア語(3)(4)はア語中級と同一
東京外国語大学[東京]n	非 ネ	教養外国語	共通ア語(5) [2]	共通ア語(6) [2]	
				専門ア語(3) [2]	後期課程アジア・日本研究コース の特殊研究演習Ⅵと共通
			ア語A1文法 [1]	ア語A2文法 [1]	
			ア語A3読解・会話・作文 [1]	ア語A4読解・会話・作文 [1]	2クラス
			ア語B1読解・会話・作文 [1]	ア語B2読解・会話・作文 [1]	
一橋大学[東京]n	非	全学共通教育 科目	ア語B3読解・会話・作文 [1]	ア語B4読解・会話・作文 [1]	
			ア語初級 [2]	ア語初級 [2]	通年科目、2クラス開講
			ア語初級 [2]	ア語初級 [2]	通年科目
明治大学[東京]*	非	共通外国語	ア語中級 [2]	ア語中級 [2]	
			ア語ⅠA [1]	ア語ⅠB [1]	
明治学院大学[東京]	非	共通科目	ア語ⅡA [1]	ア語ⅡB [1]	
			ア語の基礎A [1]	ア語の基礎B [1]	
和光大学[東京]	非	共通教養科目		ア語とその世界 [2]	
早稲田大学[東京]a	非 ネ	文学部 グローバルエ デュケーション センター	ア語1 [4]	ア語2 [4]	週2回
			ア語(入門)01 [1]	ア語(初級)01 [1]	
			ア語(入門)02 [1]	ア語(初級)02 [1]	
			ア語(準中級) [1]	ア語(中級) [1]	
			ア語(ネイティブによるア語入門)[1]	ア語(ネイティブによるア語初級)[1]	
神奈川大学[神奈川]	非	外国語学部		ア語とその文化 [2]	
				国際文化論(言語)アラビア文字を学ぶ	
東海大学[神奈川]	非	文学部	ア語入門1 [2]	ア語入門2 [2]	
防衛大学校[神奈川]n	常	共通科目	ア語 [1]	ア語 [1]	通年科目
			ア語演習 [1]	ア語演習 [1]	通年科目
日本大学[静岡]	常	国際関係学部	特定言語初級ア語 [2]	特定言語中級ア語 [2]	週2回
			特定言語上級ア語 [2]		週2回
愛知県立大学[愛知]p*	非	外国語学部	諸地域言語(ア語) [1]	諸地域言語(ア語) [1]	
京都大学[京都]n	常 非 ネ	教養・共通科 目	ア語ⅠA(文法) [1]	ア語ⅠB(文法) [1]	文法と実習を併せて履修
			ア語ⅠA(実習) [1]	ア語ⅠB(実習) [1]	
			ア語ⅡA(文法) [1]	ア語ⅡB(文法) [1]	文法と実習を併せて履修
			ア語ⅡA(実習) [1]	ア語ⅡB(実習) [1]	
		文学部	アラブ語(初級) [2]	アラブ語(初中級) [2]	大学院生も対象に含む
			ア語Ⅰ(初級) [1]	ア語Ⅱ(初級) [1]	大学院生も対象に含む
京都外国語大学[京都]	非 ネ	外国語学部	ア語Ⅰ(中級) [1]	ア語Ⅱ(中級) [1]	大学院生も対象に含む
			基礎語 [2]		週2回
			ア語Ⅱ-1 [1]	ア語Ⅰ-1 [1]	週2回。Ⅰ1と2を併せて履修
			ア語Ⅱ-2 [1]	ア語Ⅰ-2 [1]	週2回。Ⅱ1と2を併せて履修
京都産業大学[京都]	常	文化学部		ア語Ⅲ-1 [1]	Ⅲ1と2を併せて履修
				ア語Ⅲ-2 [1]	
			ア語ⅠⅠ [2]	ア語ⅠⅡ [2]	週2回。通年科目
京都ノートルダム女子大学[京 都]*	常	共通教養科目	ア語ⅡA [1]	ア語ⅡB [1]	
			ア語Ⅰ [1]	ア語Ⅱ [1]	
			ア語Ⅲ [1]	ア語Ⅳ [1]	
同志社大学[京都]	常 非 ネ	神学部	ア語Ⅳ [1]	ア語Ⅴ [1]	
			ア語入門と文法1 [2]	ア語入門と文法2 [2]	週2回
			ア語入門と講読1 [2]	ア語入門と講読2 [2]	週2回
			ア語講読1 [2]	ア語講読2 [2]	週2回
			ア語会話初級1 [2]	ア語会話初級2 [2]	週2回
立命館大学[京都]	非	国際関係学部	ア語会話中級1 [2]	ア語会話中級2 [2]	週2回
			ア語Ⅱ [1]	ア語Ⅰ [1]	
			ア語Ⅳ [1]	ア語Ⅲ [1]	
大阪大学[大阪]n	常	共通教育科目	特別外国語演習 ア語Ⅰ [2]	特別外国語演習 ア語Ⅱ [2]	
関西大学[大阪]*	非	文学部	ア語a [2]	ア語b [2]	

調査時期2014年3月から2015年10月に、各大学から聴取した情報を基に作成

			北海道 1			北海道 1		
			東北 1			青森		
			関東 28			秋田		岩手
			中部 2			山形		宮城 1
			近畿 12			福島		
			中国 2			石川		富山
			四国 0			新潟		
			九州 2			福井		長野
						岐阜		山梨
						愛知 1		静岡 1
								埼玉 2
								東京 19
								神奈川 3
								千葉 3
								</

図3 都道府県別の日本のアラビア語科目提供大学の数 (2014年度)

- 111 —

前期と後期の履修登録者数は延べ人数である。そこで、前期科目と併せて履修する必要のない後期科目と、後期のみに開講されている科目の履修登録者数を調べたところ、放送大学を含めずに226名であった。放送大学における1学期と2学期の科目は通年科目ではなく、同一科目である。2014年度に1学期で単位取得できず、2学期に再度履修登録した学生が81名であったことから、2学期履修登録者394名のうち313名が、1学期に登録せず、2学期にのみ登録したと言える。以上から、一般学生対象のアラビア語科目を1つ以上履修登録した学生数は3,456名 (2,917名 + 226名 + 313名) となる。さらに、アラビア語専攻をもつ大学の定員は、東京外国語大学が1学年30名であることから、4学年で120名、大阪大学が1学年27名であり、4学年で108名、合計228名である。この定員数を加えたおよそ3,700名 (3,456名 + 228名 = 3,684名) が、2014年度にアラビア語科目を少なくとも1つ受講した可能性のある学生数とみなしうるだろう。

図3として、表1を基にアラビア語科目を提供する大学数を都道府県別にまとめた。アラビア語科目を提供する48大学の6割が関東にあり、次に多い近畿、なかでも京阪神は4分の1である。さらに、アラビア語科目を提供する大学は、中部、中国、九州に各2大学、北海道と東北に各1大学であり、四国にはない。2014年度の総大学数781大学のうち、関東には3分の1 (255大学)、近畿には2割 (159大学) が所在する (文部科学省生涯学習政策局政策課 2014)。大学全体の比率と比較すると、近畿におけるアラビア語科目を提供する大学の比率に大きな偏りは認められない。他方、アラビア語科目を提供する大学は関東に偏在していると言ってよいであろう。関東、京阪神以外の地域では、アラビア語を学習する機会が非常に限られていると言える。

(1) アラビア語専攻のある大学

アラビア語専攻の学生は、基本的に入学願書の提出時に専攻を選択し、卒業に必要な必修科目としてアラビア語科目を履修する。主要言語は現代標準アラビア語であるが、アラビア語方言の科目も用意されている。アラビア語科目以外にも、アラビア語と密接に関連する文化、文学、歴史、政治経済、社会、地域等の科目も受講することで、アラビア語にまつわる知識の総合的な習得を行う。アラブ地域の大学と交換留学の協定を結んでいるほか、私費留学する学生も少なくない。

2012年度から東京外国語大学は言語社会学部と国際社会学部の2学部のアラビア語専攻がある。言語社会学部の定員は1学年14名である。国際社会学部にはアラビア語、ペルシア語、トルコ語のいずれかを学ぶ西アジア・北アフリカ地域専攻があり、アラビア語の定員は1学年およそ15名である。両学部でアラビア語専攻の入学定員はおよそ30名となり、4学年で定員およそ120名である。同大学は2011年度まで、外国語学部のみであり、アラビア語専攻の入学定員は15名であったが、2012年度から倍増した。常勤教員4名、非常勤教員8名、そのうち常勤教員1名と非常勤教員2名がアラビア語ネイティブスピーカーである。交流協定締結大学にはエジプトのカイロ大学、アインシャムス大学、モロッコのムハンマド5世アグダール校等がある。この専

攻が習得を目指すアラビア語は「学問的なアラビア語」、すなわち地域研究としてのアラブ研究に必要なアラビア語である（八木 2012:32）。

大阪大学外国語学部外国語学科アラビア語専攻（入学定員25名）は、2007年10月に大阪外国語大学と大阪大学の統合によって生まれた。同専攻は統合前の大阪外国語大学の外国語学部国際文化学科・地域文化学科アラビア語専攻に相当する。加えて、大阪大学の同学科日本語専攻は、2年次まで25の外国語の1つを専攻語として履修しており、アラビア語を1学年につき平均およそ2、3名が学んでいる（大阪大学外国語学部ウェブサイト）。常勤教員5名のうち1名がアラビア語ネイティブスピーカーである。非常勤教員は日本人3名である。交換留学の協定校にカタール大学がある。同専攻は3、4年次生の到達度目標として、ヨーロッパ言語共通枠参照 CEFR の「話す」「聞く」「書く」において「自立した言語使用者」とされる B1から B2を、「読む」において B2から「熟達した言語使用者」とされる C1を掲げている（藤井 2012）¹⁶⁾。

なお、四天王寺国際仏教大学（現在の四天王寺大学）は唯一のアラビア語専攻をもつ私立大学として、1983年度から2007年度まで文学部言語文化学科にアラビア語アラビア文化専攻を有していた¹⁷⁾。同専攻発足時は常勤教員5名、学生定員30名であった。1992年度から1999年度は定員が最多45名であったが、徐々に減じ、同専攻は開設から15年後に残念ながら閉じられた。

(2) 一般学生にアラビア語科目を提供する大学

アラビア語専攻以外では、アラビア語科目は選択または選択必修として提供されている場合がほとんどである。こうした科目では、ほとんどの場合、現代標準アラビア語が教えられている。大学によっては、毎年開講ではなく、隔年や3年に1度等の提供を行う場合があり、これが調査年度による大学数の変動に影響している。また、過去10年間にアラビア語科目を提供する大学の数に著しい変化はないものの、提供を止めた大学や、新たに開講した大学が存在する。

亜細亜大学、拓殖大学、慶應義塾大学等のように、比較的多くのアラビア語科目が提供されている私立大学も存在するが（表1）、一般学生向けにアラビア語科目を提供する大学に比べ、専攻をもつ大学は圧倒的に少ない。したがって、日本の公教育におけるアラビア語教育は、ほとんどの場合、第2外国語としての教育が中心であると言える。つまり、日本でアラビア語を学ぶ大学生のほとんどが、アラビア語科目を選択あるいは選択必修として履修しているのである。

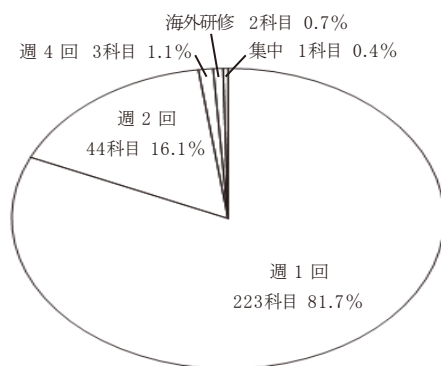
アラビア語科目の開講形態は大学・学部等によって様々なものがある。表1では代表的な形態として、前期・後期の別で示したが、3学期制をとる大学もあり、通年科目やセット履修科目もある。科目数については、単年度に1科目のみを提供する大学

16) CEFRのB2からC1は、英語においては英検（実用英語技能検定）準1級から1級に相当する。CEFRは最上位からC2、C1、B2、B1、A2、A1である。

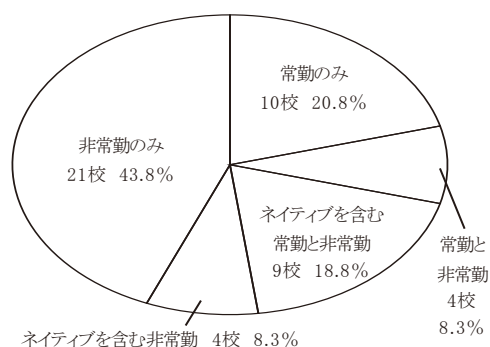
17) 2008年度に四天王寺大学人文社会学部言語文化学科中国語アジア文化専攻へ名称変更された。

もあれば、20科目以上をも提供する拓殖大学の例もある。もちろん、科目数の多い大学は複数学部で提供している場合が多い。

授業回数と時間については図4に整理した。ほとんどが週に1回90分である。しかし、約16%の科目で週2回提供されており、週に4回や海外研修を行う場合もある¹⁸⁾。また、図5として、科目担当者として、常勤と非常勤、日本人とアラビア語ネイティブスピーカーの別を大学単位で集計した結果を図示した。常勤を担当者に含む大学は47.9%ある。一方、常勤のみが担当する大学は約2割に留まり、半数の大学 (52.1%) で非常勤のみが担当していた。



注：表1の記載内容を基に著者が作成。



注：表1の記載内容を基に著者が作成。

図4 週当たり授業数等 (2014年度)

図5 授業担当者の内訳 (2014年度)

一般学生にアラビア語科目を提供する大学の1つに放送大学がある。アラビア語科目を提供する大学が関東や京阪神に集中する中、各都道府県に学習センターを置き、遠隔教育を行う放送大学のアラビア語科目は、学生をはじめとする地方在住者のニーズに応えうるものである。このアラビア語科目は2006年度に開講され、現在も継続されている (2016年度までの予定)。共通科目 (外国語) の1つであり、1学期と2学期¹⁹⁾に同一科目が提供されている。目標はアラビア語を読む、書く、聴く、話すことの基本を、アラブ文化に触れながら習得することである。

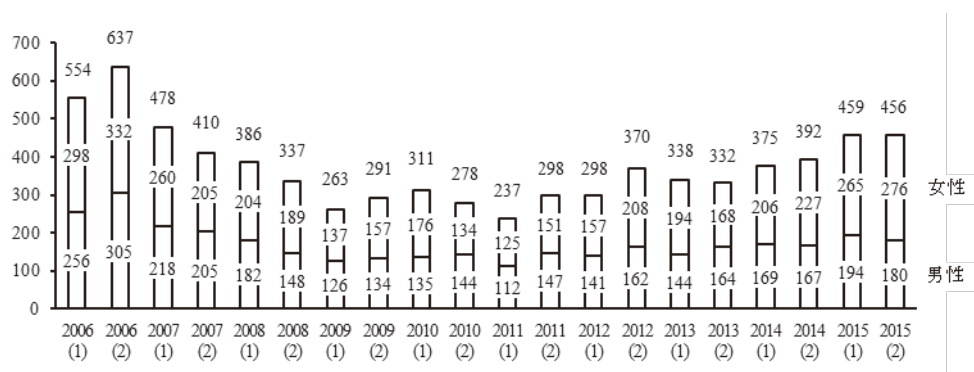
放送大学アラビア語科目における、2006年度から2015年度までの履修登録者数の推移を図6に示した。毎学期やや女性が多く、平均375名が履修登録を行っている。最多の開講当初から漸減し、200名から300名余であったが、2011年頃を境に増加傾向に転じている。

また、大学におけるアラビア語教育を活性化しようとする取り組みもみられる。

18) 慶應義塾大学総合政策学部と環境情報学部では週4回のアラビア語科目やアラブ諸国での海外語学研修の科目を設け、4年間にわたり総合的なアラビア語学習ができる環境を整えている。

19) 注9参照。

その1つが、大学生を対象としたアラビア語集中講座合宿である（アラビア語集中講座合宿 2016）。これは2015年8月末から6日間、京都府内の施設で、集中的なアラビア語学習とアラビア語のみの使用による集団生活を行うものであった。アラビア語によるコミュニケーション力の効率的な向上を目標にすることで、大学におけるアラビア語学習を促進・補完することを目的としている。2015年度は、全国の大学生45名が受講し、講師は日本人3名、アラビア語ネイティブスピーカー4名であった。時間的・経済的な問題や、安全面の不安からアラブ諸国への語学留学が困難な学生や、より一層のアラビア語学習やコミュニケーション力獲得を希望する学生からの申込が、定員の2倍近くに上った。2016年度も申込状況は同様であった。



注：(1)は1学期、(2)は2学期を指す。放送大学から聴取した情報を基に著者が作成。

図6 放送大学アラビア語科目の履修登録者数の推移

3. 考察

本研究は日本の高校および大学におけるアラビア語の教育と学習者の現況について、独自に実施した調査の結果等から、あきらかにした。日本の公教育において、アラビア語は主に大学で、一般学生を対象に教育されていることがほとんどである。こうしたアラビア語科目を提供している大学数は過去10年間に大きな変動を見せていないものの、科目数は倍増していること等があきらかとなった。

アラビア語科目を設置する中学校はなく、高校でもわずか3校のみが開設しているに過ぎない。3校に共通したアラビア語科目の提供理由は次の5点であると考えられる。(1) 長期的視野から教授が必要と判断した言語、(2) グローバル化・国際化に的確に対応するために学ぶべき言語の1つとの判断、(3) 国際理解に必要なコミュニケーション力強化の手段として、英語に加えるべき言語の1つであるとの評価、(4) 教育内容に独自性・特異性を与えるために適当な言語、(5) 大学進学後の外国語学習につなげる。これら3校のうち私立の2校は、系列大学への進学者が多いことから、一般の高校が大学受験に必要とする学習を第2外国語へ向けるゆとりをもつかもしれない。1校は公立であるが、国際化に対応する人材養成に焦点を当て、英語以外の外国語教育を充実させている。2014年度における4,300の全日制高校（文部科学省

生涯学習政策局政策課 2014) の中で、これら3校はこの上なく希少な存在である。様々な条件や事情が重なり合い、アラビア語の学習機会をもつ高校がわずかに生み出されたと言えよう。アラビア語は日本で高校までの間に学習できる機会が希少な言語の1つとすることができる。

日本の公教育において、アラビア語はほとんどが大学で教授されている。アラビア語科目を提供する大学は、2000年代中期から大きな増減はないと言っていいであろう。特に、国公立大学では、2000年代以前から2013年度まで安定している。一方、私立大学では、2001年度からの5年間で、9校の増加が認められる。この間、2001年には「9.11」、2003年から2011年にイラク戦争といった、アラブとイスラームに関わる世界的な重大事が生じている。こうした事態がアラビア語科目の提供に与えた効果はあきらかではない。例えば、2010年から2012年には「アラブの春」、2011年からはシリア内戦といった重大事もあったが、この時期以降におけるアラビア語科目設置への影響は、大学数からは不明である。しかし、「9.11」がアラビア語科目の開設に幾ばくかの影響を与えたとの推察が、まったくの見間違いであるとの断定をためらうほどに、その衝撃は大きいものであった。

他にも、アラビア語科目提供大学の数の増減については、様々な要因が考えられる。社会からの要請といった社会的需要、高等教育研究機関としての学問・研究面での需要といった大学外の要因、大学改革等の大学の方針の転換、経営状態、アラビア語科目を担当可能な教員の有無、学生の要求等の大学内の要因が考えられる。また上述のアラブ・イスラーム関連の重大事は、アラビア語やアラブ・イスラーム文化への肯定的な関心ばかりでなく、不安、嫌悪、忌避といった否定的な感情や志向を生む可能性も指摘できる(松本 2006: 199, 202; Miura 2006: 179-183)²⁰⁾。大学のアラビア語科目の提供を左右する要因とその影響の大きさについては、さらなる研究が必要である。

大学が科目を提供する外国語の中でアラビア語をみると、同じアジアの言語である中国語や韓国・朝鮮語に比して、アラビア語科目を設置する大学は非常に少ない。中国語と韓国・朝鮮語は多数の高校においても開設されており、地理的に近く、歴史的にも密接なかかわりを持ち続けてきた地域の言語である。そうした言語と比べて、アラビア語と日本人のかかわりが弱いことの一端を示す結果と言えるだろう。

また、大学によって科目が提供される様々な外国語の中でみても、アラビア語は非常に地味な存在である。日本は文化的、地理的にアラブ地域とは比較的離れており、歴史的には直接的な関係をもち難かったと言える。しかし、近年、日本とアラブ地域との関係が資源エネルギー等のもつ意義を背景に大きく変化していることは、指摘するまでもない。また、世界におけるアラビア語の重要性は増大している。公用語とする国は20か国を超え、国連の6つの公用語の1つでもある。こうした事情

20) 松本(2006)は高校生を対象とした質問紙調査から、高校生が抱くイスラームのイメージが否定的であることを報告している。Miura(2006)も調査対象とした大学生から同様の結果を得ている。

を考慮すると、アラビア語科目を提供する大学数はさらに多くてしかるべきとも言えよう。グローバル化が進む中で、アラブ・イスラーム諸国と日本との関係は重要性が増すばかりであろう。科目を提供する大学は比較的多いものの、ドイツ語、ロシア語、フランス語に減少傾向が認められる一方で、アラビア語科目を提供する大学数の安定した傾向は、アラビア語のもつ重要性への認識が支えられているとも考えられる。日本人のアラブ・イスラーム理解が否定的な偏りを持ち、ステレオタイプに支配されることを回避し、正しい理解を促進するためにも、アラビア語の学習機会を増やしていくべきである。

外国語教育に、その成果として言語を使いこなせる水準が求められるとするならば、アラビア語専攻が2大学のみしかない現状は憂うべきものであろう。こうした水準は、一般学生を対象として提供されているアラビア語科目の内容では、到底覚束ない。アラビア語学習者を増やし、一定水準の技能の習得者をより多く生み出すためには、アラビア語専攻がさらに設置されるか、あるいは一般学生としてアラビア語科目を受講した者がさらに学習を進展させる機会を得やすくすることが求められる。こうした役割はアジア・アフリカ語学院（公益法人アジア・アフリカ文化財団 2016）やアラブイスラーム学院（アラブイスラーム学院 2016）を代表とする専門学校等が担いうるものであることは言うまでもない。また、先に触れたアラビア語集中講座合宿（アラビア語集中講座合宿 2016）には、実際に多くの意欲ある学生が参加している。こうしたアラビア語学習の場をさらに増やす努力が必要であろう。

一般学生に提供されるアラビア語科目として、週2回開講される科目が約16%あることは注目に値するであろう。言うまでもなく、大学における特定の科目は週に1回が一般的である。ほとんどの受講者がアラビア語の初習者であることを考慮すると、週1回90分の授業では不十分であり、それを是正しようとする動きが示されているのかもしれない。

アラビア語科目を開設する大学のほぼ半数（47.9%）で、科目担当者に常勤教員が含まれていた。少なくとも20余りの大学にアラビア語科目を担当可能な常勤教員が籍を置いていたと言える。また、非常勤教員だけに頼っている大学がほぼ半数（52.1%）に上り、非常勤教員への依存度は高いと言える。さらに、4分の1強（27.1%）の大学がアラビア語ネイティブスピーカーを採用していた。こうしたネイティブスピーカーの役割は、今後増加していくと考えられる。

一般学生にアラビア語科目を提供する大学では、その枠組みや目的、科目のレベルや学習目標は様々である。実際の科目内容については今後精査する必要があるが、入門・初級のレベルが多いようにみえることは、専攻でないため当然とも言えよう。また、一般学生にアラビア語科目を提供する大学のほとんどで現代標準アラビア語が教えられ、方言がほとんど扱われていない現状は、無理からぬ点もあるであろう。しかし、世界における現在のアラビア語教育は、アラビア語方言を視野に入れた方向へ向かっている（Ryding 2016）。ネイティブスピーカーが日常生活で用いている方言を理解する必要性が認められるためであろう。この流れに沿えば、日本も現代標

準アラビア語に加えて、アラビア語方言の教育を進める必要があるということになる。しかし、日本では、アラビア語教育における方言の位置づけについて、十分に議論されていないのが現状である。一般学生対象のアラビア語科目に方言の導入を検討することは今後の課題と言える。

一般学生に提供されるアラビア語科目の数は、2005年度からおよそ10年間に倍増していた。この理由の1つに、履修希望学生の増加があると考えられる。例えば放送大学の履修登録者数の場合、およそ2006年度から2011年度までは減少気味であるが、それ以降は上昇傾向にある。語学科目は多人数では成果が得られにくいことから、定員を設けている大学が多いと推測される。語学科目では希望者の増加が科目の増加に繋がりやすいと推察されるのである。

本研究では、アラビア語科目やその提供大学数に加え、科目毎の履修登録者数を調査し、その結果から、2014年度に1つ以上のアラビア語科目を受講した学生数の推定を試みた。推定された学生数については、過去に比較できる情報がないこと等から、これ以上の考察は難しい。ただ、アラビア語の教育と学習者に関する調査として、科目を提供する大学数は重要な指標の1つではあるが、今後は科目数や履修者数をも把握し、推移を検証していく必要があるだろう。

本研究の調査結果から、アラビア語の教育環境には量的・質的な向上の必要性が認められる。量的な点として、アラビア語科目を提供する大学数の増加と、地理的偏在の改善があげられる。質的な点として、一般学生を対象とした大学において、より高い学習効果が期待できるカリキュラムがある。例えば、米国の多くの大学では、初級の場合、1回50分の授業が週に5回程度開講される。これは継続して、少しずつ学んでいくことが言語学習に有効との理由によるものと推定される。日本でも、週に1回の科目が8割に達する現状を改善し、より密度の高い学習が可能となる工夫が必要である。

4. 本研究の課題と将来の展望

本研究は、主に高校と大学におけるアラビア語の教育と学習者について、これまでの調査結果に加え、独自調査の結果を基に現況を示し、考察を加えたものである。しかし、限界や課題も多く残されている。今後、開設されているアラビア語科目の教授内容や水準等、受講する学習者について調査することによって、さらに詳しくアラビア語教育の実態をあきらかにしていく必要がある。また、他国のアラビア語教育の状況と比較等を通じて、日本におけるアラビア語教育の特色、長所・短所、進むべき方向性について、明確にしていくことが求められる。

2015年11月や2016年3月のヨーロッパにおける同時テロ等、イスラーム教徒やアラブ人に対するイメージを悪化させかねない重大事件が続発している。アラブ・イスラーム地域は多くの日本人にとって、地理的に遠く、馴染みの薄い地域と言える。日本におけるアラビア語教育をさらに普及させ、充実させていくことで、同地域やその人々に対する正しい理解は確実に進むと言える。アラビア語を用いて活躍する

人材が増え、アラブ・イスラーム地域の人々との親交が深まることで、世界の平和と繁栄に貢献していくことを願ってやまない。

特記事項

本研究は次の研究会発表を基にしている。鷺見朗子 (2015)「日本におけるアラビア語教育機関とその学習者」第34回関西アラブ研究会 (2015年10月25日大阪大学)。

謝辞

本研究は JSPS 科研費22520599の助成を受けたものである。

調査に快くご協力いただきました高校、大学、文部科学省高等教育局の皆様には深く感謝申し上げます。

[引用文献]

- アジア・アフリカ文化財団 (2016)「アジア語学習」<http://www.aacf.or.jp/asia/> 参照2016年6月1日。
- アラビア語集中講座合宿 (2016)「アラビア語集中講座合宿」<http://arabic.web.nitech.ac.jp/> 参照2016年6月1日。
- アラブイスラーム学院 (2016)「アラブイスラーム学院」<http://www.aii-t.org/j/> 参照2016年6月1日。
- 大阪大学外国語学部 (2016)「日本語専攻」http://www.sfs.osaka-u.ac.jp/about_fs/edu_fl_jpn.html 参照2016年6月1日。
- 岡戸浩子 (2007)「日本における外国語施策の歴史と動向」山本忠行・河原俊昭編『世界の言語政策 第2集：多言語社会に備えて』くろしお出版, pp. 7-18.
- 門屋由紀 (2006)「日本の大学におけるアラビア語教育の現状とその問題—アラビア語教育の歴史とアンケート調査の結果から—」アラブイスラーム学院編『日本におけるアラビア語の現状：教育と業界のニーズ』アラブイスラーム学院, pp. 1-49.
- 神奈川県立横浜国際高等学校 (2016)「本校の外国語教育」<http://www.yokohamakokusai-h.pen-kanagawa.ed.jp/pg133/pg180.html> 参照2016年6月1日。
- 慶應義塾志木高等学校 (2016)「ことばと文化」24言語 志木高から世界を眺める」<http://www.shiki.keio.ac.jp/education/23languages/> 参照2016年6月1日。
- 慶應義塾志木高等学校 (2016)「進路状況」<http://www.shiki.keio.ac.jp/course/> 参照2016年6月1日。
- 後藤裕加子 (2013)「歴史学における言語教育」第29回日本中東学会年次大会 (2013年5月11日大阪大学) 第1部シンポジウム「中東研究における言語教育を考える—学ぶ立場と教える立場—」配布資料。
- 大学入試センター (2016)「受験者数・平均点の推移 (本試験) 平成24年度センター試験以降」<http://www.dnc.ac.jp/data/suii/h24.html> 大学入試センター。参照2016年6月1日。
- 高階美行 (2007)「アラビア語教育到達度評価制度とアラビア語検定試験の可能性」竹田新編『アラビア語学習到達度評価システム開発の基礎研究 (平成17年度-平成18年度科学研究費補助金 (萌芽研究) 研究成果報告書)』 pp. 17-26.

- 戸村潔 (1997)「第2外国語の導入について」『英語科研究紀要』No. 7, pp. 62-63.
- 藤井章吾 (2012)「大阪大学のアラビア語教育の歴史と現状と将来」ワークショップ(2012年12月1日アラブイスラーム学院) 報告書『日本の大学とアラブ・イスラーム学院におけるアラビア語教育—日本人アラビア語の語学力向上のための考察』アラブイスラーム学院, pp. 6-28.
- 松本高明 (2006)「日本の高校生が抱くイスラーム像とその是正に向けた取り組み：東京・神奈川の高校でのアンケート調査を糸口として」『日本中東学会年報』No. 21-2, pp. 193-214.
- 文部科学省高等教育局大学振興課 (2002)「大学における教育内容等の改革状況について(平成13年度)」http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286184/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/14/11/021107.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省高等教育局大学振興課 (2004)「大学における教育内容等の改革状況について(平成14年度)」http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286184/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/03/04032301.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省高等教育局大学振興課 (2005)「大学における教育内容等の改革状況について(平成15年度)」http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286184/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/03/05060902.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省高等教育局大学振興課 (2006)「大学における教育内容等の改革状況について(平成16年度)」http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286184/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/06/06060504.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省高等教育局大学振興課 (2007)「大学における教育内容等の改革状況について(平成17年度)」http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286184/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/04/07041710.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省高等教育局大学振興課 (2008)「大学における教育内容等の改革状況について(平成18年度)」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/06/08061617.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省高等教育局大学振興課 (2009)「大学における教育内容等の改革状況について(平成19年度)」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/03/1259150.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省高等教育局大学振興課 (2010)「大学における教育内容等の改革状況について(平成20年度)」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1294057.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省高等教育局大学振興課 (2011)「大学における教育内容等の改革状況について(平成21年度)」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1310269.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省高等教育局大学振興課 (2013)「大学における教育内容等の改革状況について(平成23年度)」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1341433.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省高等教育局大学振興課 (2014)「大学における教育内容等の改革状況について(平成24年度)」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1353488.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省高等教育局大学振興課 (2015)「大学における教育内容等の改革状況について(平成25年度)」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1361916.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省生涯学習政策局政策課 (2013)「平成25年度学校基本調査」http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1342607.htm 参照2016年6月1日.

- 文部科学省生涯学習政策局政策課 (2014)「平成26年度学校基本調査」http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1354124.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省初等中等教育局国際教育課 (2012a)「平成20年度高等学校等における国際交流等の状況について」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/koukousei/1323946.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省初等中等教育局国際教育課 (2012b)「平成23年度高等学校等における国際交流等の状況について」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/koukousei/1323946.htm 参照2016年6月1日.
- 文部科学省初等中等教育局国際教育課 (2012c)「平成25年度高等学校等における国際交流等の状況について」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/koukousei/1323946.htm 参照2016年6月1日.
- 立教新座中学校・高等学校 (2016)「自由選択科目」https://niiza.rikkyo.ac.jp/education/senior/elective_subject/ 参照2016年6月1日.
- 立教新座中学校・高等学校 (2016)「大学進学状況」<https://niiza.rikkyo.ac.jp/profile/situation/> 参照2016年6月1日.
- 八木久美子 (2012)「東京外国語大学のアラビア語教育」ワークショップ (2012年12月1日アラブ・イスラーム学院) 報告書『日本の大学とアラブ・イスラーム学院におけるアラビア語教育—日本人アラビア語の語学力向上のための考察』アラブ・イスラーム学院, pp. 30-35.
- Miura, Toru. (2012) “The State of Training and Research in Middle Eastern Studies in Japan.” *Asian Research Trends New Series*. pp. 85-110.
- Miura, Toru. (2006) “Perceptions of Islam and Muslims in Japanese High Schools: Questionnaire Survey and Textbooks.” 『日本中東学会年報』 No. 21-2, pp. 173-191.
- Ryding, Karin, C. (2016) “Arabic Language Learning: If Diglossia Is the Question, Then What Is the Answer?” 『日本中東学会年報』 No. 31-2, pp. 63-92.
- Sumi, Akiko. M., and Katsunori Sumi. (2016a) “Interest in Arabic Culture among Arabic Language Students in Japanese Universities.” 『日本中東学会年報』 No. 31-2, pp. 151-182.
- Sumi, Katsunori, and Akiko M. Sumi. (2016b) “Orientations among Japanese University Students Learning Arabic.” 『日本中東学会年報』 No. 31-2, pp. 115-150.